

空軍ニュース：最新鋭機 SU-35 は南部戦区空軍に配備される

漢和防務評論 20170501(抄訳)

阿部信行

(訳者コメント)

中国空軍に最初の SU-35 が渡されました。配備先は航空兵第 2 師団の第 6 連隊(広東省湛江市遂溪基地)です。同基地は SU-27SK の最初の受領基地でもありました。

中国は、当面 4 機で試験飛行を行い、中国用にどのように改修するか、主目的は、中国製武器を搭載できるようにすることにあると思われます。

漢和は、ロシアのシステム技術を学習し、国産の J-11D 以降の改修に資したいねらいがある、と指摘しています。

KDR モスクワ・東京特電：

モスクワ及び北京の権威筋は、2017 年に 10 機の SU-35 が遂溪の航空兵第 2 師団に配備されることを初めて明らかにした。残りの 10 機が 2018 年に提供される。この提供の過程は、KDR がすでに報道した内容と変わりはない。権威筋は KDR に対し次のように述べた：24 機の SU-35 の配分先をめぐって、中国空軍内部の利益集団間で相当激烈な争いがある。東アジア地域の戦略、戦術を考えると、SU-35 の主要配備先を航空兵第 2 師団第 6 連隊にすれば大きな争いにはならない、と。

しかし第 2 師団が 24 機の SU-35 を全て獲得することはできない。第 6 連隊が SU-35 を 18 機乃至 20 機装備することで争いが大きくなっている。現在 4 機の SU-35 が滄洲（河北省）のパイロット戦術試験飛行センターに到着しており、今後試験飛行を行う。その結果で中国空軍向けにどのような改修が必要かが決定される。24 機の SU-35 は、現在”北斗”衛星航法システムを搭載している。権威筋によると：その後 4 機の SU-35 は鼎新（甘粛省）に進出し戦術対抗訓練に使用する。このように見ると、第 2 師団に配備される機数は多くても 20 機である。

SU-27SK 及び SU-30MKK を最初に装備した航空兵第 3 師団も SU-35 の獲得を強く希望している。しかし今回は第 2 師団を優先することになった。1996 年 6 月 25 日、第 2 グループの SU-27SK がロシア人パイロットの操縦で遂溪に到着した。当日、本誌総編集はロシア前線航空兵司令部を取材しており、8 時間前にこのニュースを知った。第 2 グループの SU-27SK が当時装備していたのは GPS 航法システムであった。現在第 6 連隊に配備されているのは J-11A である。中国空軍内部では公然の秘密であるが、J-11A は最も歓迎されている戦闘機である。しかし空軍飛行部隊は、實際上 J-11B/BS を歓迎しない。J-11B/BS の FBW (FLY BY WIRE) 及び国産の太行エンジンの安定性が空軍の要求レベルに達していないようだ。したがって南部戦区空軍の全ての第一線重点作戦部隊には J-11B は配備されていない。J-11A は、依然として中露で共同生産した契約分の SU-27SK

に含まれ、ロシアのスホーイ社は、中国の改修事業を支援している。70 機の J-11A は、R-77 型アクティブ誘導レーダー空対空ミサイルを使用できる。現在、これらの戦闘機は第 2 師団第 4 連隊にも配備された。したがって第 2 師団 4、5、6 連隊は、それぞれ J-11A、J-10A (桂林)、SU-35 が配備される。同師団は、中国空軍で初めて、第 3 世代及び第 3.5 世代戦闘機のみを装備する師団となった。戦闘力は中国空軍の中で NO. 1 である。第 3 師団は対地攻撃も担っている。

中国空軍が第 2 師団を重視する度合いは、外国空軍との交流状況を見てもわかる。KDR バンコク特派員の記事によると：第 2 師団は、中国とタイ国空軍の聯合演習に 2 回参加した。2014 年、第 2 師団のパイロットはタイ国空軍のサーブ (SAAB) 社製グリペン (GRIPEN) 複座戦闘機に搭乗し操縦した。2015 年、第 2 師団は 4 機の J-11A をタイ国に派遣し、4 機のグリペン戦闘機と対抗演習を行った。このときグリペンの方が先に J-11A をロックオンした。このことから、例え中国空軍では最高水準の第 2 師団であっても、NATO の水準には及ばないことが分かる。同特派員の報道によると：2016 年は、中国・タイ国空軍聯合演習は行われなかった。中国空軍としては、グリペンに接触する最後の機会だったかもしれない。なぜなら 2014 年以降、米国はタイ国に圧力をかけたからである。もし再び中国空軍とグリペンを接触させたら、タイ国空軍にグリペンのエンジンや部品は提供しない等々と。このように第 2 師団パイロットが外国の先進型戦闘機に接触できた機会は、第 3 師団パイロットに比べれば多い。米国が如何に厳重に監視していようとも、パキстанは中国空軍と F-16 BLOCK 52 を接触させた可能性がある。したがってオバマ時代は米国とパキстанの関係は冷淡であった。ただしこれは KDR の推測に過ぎないが。

ある説によると、SU-35 を第 2 師団に配備するのは主として南シナ海方面に対処するためであるという。ベトナムやフィリピン空軍に対処するのであれば、SU-35 は必要ない。空対空作戦では J-11A や J-10B で十分足りる。したがって第 6 連隊に SU-35 を配備する真の目的は、台湾の東海岸の制空権獲得のためである。戦時、中国はバシー海峡を支配し、台湾東岸に進入する。高性能の SU-35 で航空優勢を獲得する。バシー海峡(幅は 350KM もある)を支配できなければ、中国南海艦隊の水上艦及び空母は台湾東岸に進入できない。そうすると、中国海軍水上艦は、花蓮等の台湾空軍基地に対する巡航ミサイル攻撃ができない。中国遂溪基地は、台湾東岸から 1300KM の距離にある。SU-35 の作戦半径が 1500KM なので、空中給油を受けなければ、SU-35 の台湾東岸における滞空時間が相当短くなる。中国は、ウクライナで改修した IL-78 空中給油機を 3 機輸入した。現在、南部戦区空軍で頻繁に見られる。台湾海峡の制空権獲得に関しては、航空兵第 9 師団、第 3 師団、第 18 師団、第 29 師団、第 2 師団第 4、5 連隊の第 3 世代戦闘機で十分対処できる。台湾の F-16 が V 型に改良されると、中国空軍 J-11B/C、及び J-16 の AESA レーダーへの換装は早まるであろう。

ロシアは中国が第 2 グループの SU-35 を輸入するよう強く希望している。しかし KDR は、J-16 及び J-11D の改修状況によって決まる、と予測している。J-16 (SU-30MKK の複製) の開発計画と同じく、中国は SU-35 を獲得する前に、すでに J-11D を改良する計画を確立した。やはり SU-35 の概念を採用し、太行エンジンを改良し、ファンの直径を増大し、新たな AESA レーダーに換装

し、J-11D の胴体後部を改修する。この計画は現在進行中である。中国空軍は引き続き様子を見ている。もし J-11D の改修及び J-20 への換装が中国空軍の満足を得られなかった場合、引き続き SU-35 を輸入するようになるのか？現在結論を出すのは時期尚早である。

ある説によると、ロシアは 117 エンジンを（分解できないように）溶接したという。中国に複製させないためである。KDR は、117S エンジンがモジュール化構造を進化させたため誤解されたものと思う。”太行”B の改修では、やはり大きなファンとさらなるモジュール化を採用している。SU-35 のアビオニクスは、フライト・コントロール及びファイヤ・コントロールを完全に整合させ、すべてデジタル化され、ソースコードの解読は不可能に近い。

なぜ SU-35 を最初に第 2 師団に配備したのか？もうひとつの考え方は、南シナ海から北上する米海軍の F-35、F-18E/F に対応するためである。後者に対しては、スホーイ設計局の主任設計師が KDR の取材に対し何度も表明している：我々が SU-35 を改良した目的は、作戦時の性能指標を F-18E/F 或いは F-22 よりも高くするためである、と。

中国が SU-35 を輸入した主目的は、ロシアの航空システム技術を学習し、J-11D 以後の改良型を開発する為である。

第 2 師団第 6 連隊は、密閉式の強化堡壘型格納庫を最初に建設した部隊である。全部で 26 個あり、2+8+8+2+6 個の構成になっている。滑走路の東西両側には 2+2 個の格納庫を建設しているのは戦闘機の緊急発進用である。主として米軍偵察機に対する迅速な迎撃を行うためである。もし 20 機だけの配備ならば、残りの 6 個の格納庫は何に使うのか？このことから、第 6 連隊は依然として混合編成を採用する可能性がある。残りの格納庫は引き続き J-11A が使用するのか？中国空軍は、通常、連隊毎に 1 個機種で編成される。

以上